

～企業コミュニケーションの価値を多面的に高める「場」～

日本には企業博物館が全国に1000はあるとみられています。企業博物館を立ち上げ自ら館長を務めた栗津重光さんが、全国200か所近くの企業博物館の訪問で見出したコミュニケーション価値を、あますところなく伝えます。

パナソニックミュージアム①

「松下幸之助歴史館」

〒571-8501 大阪府門真市大字門真 1006 番地
<https://holdings.panasonic.jp/corporate/about/history/panasonic-museum/facility/konosuke-museum.html>

【入館料】無料

【開館時間】午前 10 時～午後 5 時

【休館日】日曜・祝日・お盆・年末年始・その他

【展示の概要】

パナソニックミュージアムは創業者の松下幸之助の言葉や、歴代の製品を通して、パナソニックグループの“心”を未来に伝承したいという思いから、創業 100 周年に当たる 2018 年に開設された。「松下幸之助歴史館」と「ものづくりイムズ館」の 2 館と「さくら広場」で構成されており、今回紹介する「松下幸之助歴史館」は松下幸之助 94 年の生涯で、幾多の苦難を乗り越える中に見出した、「行き方・考え方」。その“道”をたどりながら、松下幸之助の経営観や人生観を学ぶことができる。幸之助が歩んだ 94 年の道を、7 章建てで展開している。1 章「礎」2 章「創業」3 章「命知」4 章「苦境」5 章「飛躍」6 章「打開」7 章「経世」。

【主な展示】

松下幸之助は 1894 年 11 月 27 日、和歌山県和佐村の裕福な旧家に誕生した。しかし 4 歳の時、父が米相場で失敗し一家は没落。小学校を中退し、わずか 9 歳で丁稚奉公に出る。幾つかの奉公を経て 15 歳の時に、大阪市内を走る市電を見、電気の時代が到来すると確信、大阪電燈（現関西電力）へ移る。成績優秀で昇格も早い。あるとき、自ら考案した電灯用のソケットを上司に提案するが却下される。そのため思い

切って独立を決行する。（序章、1 章）

1918 年 3 月 7 日、松下幸之助は妻むめの、義弟井植歳男（三洋電機創業者）の 3 人で、大阪・大開町に松下電気器具製作所を創業。改良アタッチメントプラグ、二股ソケット、自転車用砲弾型電池式ランプ、電熱器、ラジオ等の新規事業を次々に立ち上げた。（2 章）

1932 年の春、幸之助は産業人として「事業を通じて貧困を払拭する」という使命を自覚するに至り、全店員にその思いを共有すべく第 1 回創業記念式を挙行了。翌 1933 年、現在の門真に拠点を移すが、その後業容は拡大する。（3 章）

時代は戦争へと突入し、会社も軍需生産への移行を余儀なくされた。終戦後は即、民需生産へと切り替えたものの、GHQ から制限を課せられたこともあり、グループ解体の危機に陥るが、幾多の困難を乗り越えながら苦境を脱した。1951 年、初渡米。豊かな暮らしぶりを目の当たりにし、日本でもそれを実現させようと、海外との提携を図る。技術力強化を目的としオランダのフィリップス社と技術提携し、日本の家庭電化を牽引していった。（4 章、5 章）

1961 年、会長に就任したが、高度成長の行き過ぎを警戒した日銀が金融引き締めを実施。不況と電化製品の一巡が重なり、危機的状況を迎える。流通の改革や、大型新製品により、再び事業を軌道に乗せる。（6 章）

創業 50 周年を経て幸之助は社会貢献活動に注力。1973 年、78 歳で相談役に就任したが、より良き日本、より良き世界の実現をめざす情熱は尽きることがなかった。1989 年 94 歳で没。（7 章）

【展示の変化】

旧の松下電器歴史館時代から何度も訪問していると、その都度展示の変化を感じる。本誌2024年7月号で企業博物館研究の第一人者・高柳直弥がこう語っていた（要旨）。「企業博物館は、常に試行錯誤している。いくつかの企業博物館の観察で実感するのだが、リニューアルや展示替えを繰り返しながら、あるべき姿に向かって前進を続けているのだ」。

これを実践しているのが「松下幸之助歴史館」である。展示替えは何度か出会った。

本文に掲載した画像もその一つ。こちらは、1964年家電不況に陥った際、取引代理店の社長を熱海に招集して打開策を検討した（熱海会談）が、参加者からは経営悪化の実態や苦情が相当数寄せられた。幸之助はこの時「原因は私ども自身にある」と素直に謝罪の言葉を述べる。その態度に感銘した出席者たちと和解し、今後の協力を誓い合った。掲載した発言の画像は、当初、館内の端末を検索すれば出てくるといった状況だったのだが、それがある訪問時には、通常の展示で登場したのである。これには、驚かされた。

このような展示替えはなかなかできるものではないが、企業として、博物館として『あるべき姿に向かって』の変化を敢行しているのだと感じさせられた。

【栗津の視点＝見どころ】

以前のことが、ある年若い友人から e-mail が届いた。彼は筆者が企業博物館研究をしていることは承知している。記憶に従ってメールの内容を再現してみる。「今度、二度目のヨーロッパ転勤となりました。今回は小規模ですが、副社長に就任します。経営の一端を担うことになるため歴史館を訪れました。半日おりました。何がどうということではないのですが、経営とはこのように考えなければならない、と示唆を受けた気持ちになりました」。

この施設は創業 50 周年の 1968 年、社員、グループ社員が幸之助の思想信条を学び、共有化する目的で開設されたと聞いた。評判もよく一般の見学者を受け入れているがやはり最重要なのは内部ステークホルダーである。

そうした意味でも、この施設は開設の意図を十分果たしているのだと感じた。



1964年熱海で開催された代理店との懇談会での幸之助の発言（松下幸之助歴史館提供）。